

明治五年鑄

近世史談

共立舎藏

特32

290

近世史談 初篇 合衆國總叙

合衆國は我鄰交の國にて彼我人民の往來極めて
 多し其は隨て我國の士民亦多く彼國の政体凡
 俗を論ぜり然も政体と論ずるは固より易
 事にあらず況てその國を官する之を家おせざ
 りの合衆政体を論ずる是豈に難事にあらずや
 蓋し政は國風民情に從ふを得ざるは彼國
 の合衆政体も偶然にして成あらず必其由て

近世史談

叙

一

来^{きた}る所^{ところ}あるべきあり故^{ゆゑ}に彼^{かの}國^{くに}の史^し鑑^{かん}と閱^{よみ}せざ
 ば其^{その}政^{せい}の要^{よう}旨^しを得^えべうらぐ因^{ゆゑ}て今^{いま}其^{その}史^しを譯^{やく}
 し用^{もち}世^よの志^しある人^{ひと}示^しさんとす叔^{しやく}先^{せん}茲^{こゝ}に彼^{かの}國^{くに}
 獨立^{どくりつ}せしとき^{とき}の事^{こと}情^{じやう}を述^のぶべけまば乃^{すなは}強^{かう}暴^{ぼう}の
 英^{えい}人^{にん}と七^{なな}年^{ねん}苦^く戰^{せん}をなしたるの艱^{かん}難^{なん}を想^{おも}見^みるべ
 し吁^{あや}老^{らう}なる父^{ちち}母^{はは}は其^{その}子^こをもて老^{らう}後^ごの樂^{たの}みとす
 べきものあるに之^{これ}を血^ち不^ふ注^{ちゅう}げる國^{くに}旗^きの下^{もと}に出^い
 し強^{かう}暴^{ぼう}の敵^{てき}を禦^おがしめ以^{もつ}て國^{くに}を愛^{あい}し神^{かみ}不^ふ奉^{ほう}ず
 るの勤^{ちん}をふさしめたり弱^{じやく}き征^{せい}婦^ふは戰^{せん}に出^いたり

夫^{おつ}の苗^{ぼう}守^{しゆ}不^ふ残^{ざん}りて憂^{うれ}苦^く併^ひ到^{たう}し鐵^{てつ}手^てりて其^{その}力^{ちから}を
 尽^{つく}し以^{もつ}て事^{こと}物^{ぶつ}の缺^{けつ}乏^{ぼう}を補^{おぎな}ひたり又^{また}國^{くに}を愛^{あい}する
 の良^{りやう}將^{しやう}勇^{ゆう}士^しは陣^{ぢん}中^{ちゆう}にありて身^みを被^おりは衣^い敗^{ぱい}ま
 力を支^さすは食^{しょく}乏^{ぼう}しく或^{ある}は跌^{たふ}りて敵^{てき}を迎^{むか}へ或^{ある}は
 路^ぢ上^{じやう}に血^ち痕^{こん}を印^{いん}せる所^{ところ}の傷^{きず}豆^{まめ}りて戰^{せん}を交^まへた
 り然^{しか}まば家^{いへ}に在^あるものも戰^{せん}に出^いたりものも同^{どう}一^{いつ}
 般^{ぱん}に苦^くの多^{おほ}かりしと得^えて知^しるべし実^{じつ}に當^{たう}時^じ
 兵^{へい}間^{かん}の事^{こと}情^{じやう}斯^かく悲^ひ憤^{ふん}不^ふ堪^{かん}ざるまとのみあり然^{しか}
 ばども元^{げん}帥^{すい}華^か盛^{せい}頃^{きん}を始^はめとして英^{えい}雄^{ゆう}豪^{ごう}傑^{けつ}実^{じつ}不^ふ

多けきば遂に英人を擊敗り国を自立し以て斯
 る強大きんたい不及びたり抑も彼国今不在は興旺繁
 華の域かあまど其祖先そせんの始めて歐羅巴おうろぱより移住いりぢゆう
 せしときは只蕭條たる一僻壤いっぺきりやうにて橋梁きやうりやうおく舟
 車くるまおく高堂かうたうなく道路だうぢうなく滿日草木まんじつそうぼく森々として
 猛き野獸まうじゆうの咆哮ほうこうするを聞き無知の野蠻やばんの徘徊はいかい
 するを見るのみ斯くて移住の人々寒を忍び飢不
 耐へ或は野蠻と戦ひけり草莽そうもうを開き道路を造
 り屋宇おくうを建て荒野かうやを墾して畦せとし畑はたとし以て

農務商法のうむしょうぽうを精求せいきゆうせし其子孫しそん或は其親朋しんぺうよく
 其志そのしを継つぎ勉強べんきやうしけきば生聚せいじゆ日く繁しげく遂たうみ千
 餘里じゆりの間市井しせい相望さうぼうみ道路だうぢう相接せうせつし以て今の盛業せいぎやう
 の基もとをあしたり凡家国の祖先そせんたるものは必千かならず
 辛万苦しんばんくを嘗あかるものおまど就中じゆうぢゆう彼国祖先そせんの移住いぢゆう
 草創そうじゆうの經營けいぎやう惨淡たんたんたるおまどは其状そのじやう言語げんごお尽すべ
 きおあらんぞ恐らく七年の戦たたかるも勝るべき苦お
 きば是亦これまたその艱難げんなんを想見おもひみるべし然しかまは則ち彼
 国の宇内うない小雄視せうしゆし教化きやうか著明しやくめいの誉ほまれを得たるも畢つ

竟一朝一夕の故にあらずば祖先より以來継ぐ承
 く自主の心を有し愛国の志を守り諸科の学藝
 を勵み公益の工夫を謀り以て能く許多の艱難中
 小忍耐せし所の功德ふよりて然しめたるは
 得て知るべし予彼史を讀む者の能史中の趣を
 知り其要領を得以て彼我国風民情の同異を考
 んを願ふ因て數言を述るはと此の如し

吉田賢輔 識

初篇凡例

一 是史談は初篇におゐて亞國を記し二篇にお
 めて歐羅巴各國を記す
 一 亞國土人此書にて土人もいふは皆の語は我
 小用なきやうなきども是亦記せざるを得ざ
 るば則ち初篇の末卷におゐて之を記載す其
 由へは文明と蛮野との違如何を示さんが為
 めなり

一合衆国獨立のときの戦争始末を見んと欲するものは初篇卷二を見るべし

初篇卷一目録

一 亞國あめりか四百年前の事

一 フロンビュスの事

一 亞國あめりか發見はつけんの事

一 コロンビウスころんびうす尚なほ三四さんじゅう船旅せんりょをおかす事并ならカボットの事

事

一 バルボアマゲルランコルテズの事

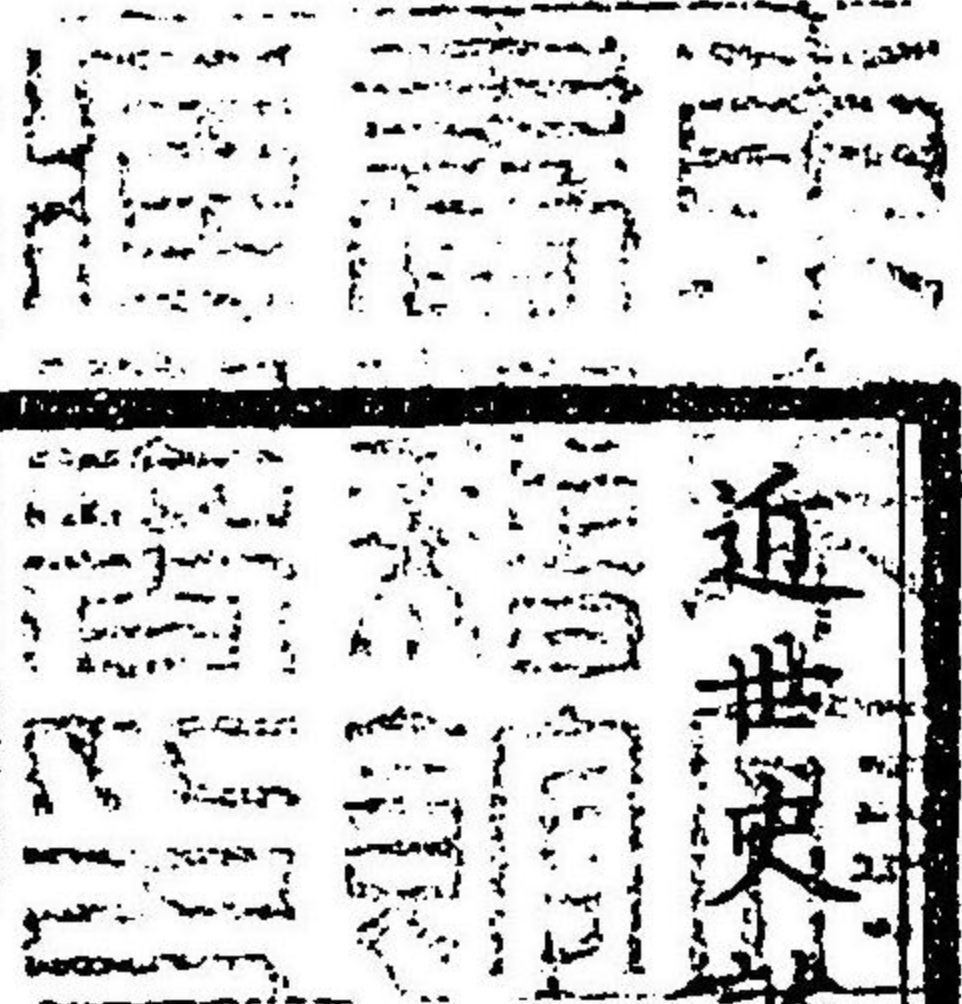
一 佛人ぶつじん亞國あめりかより地方を發見する事并ならデソトの事

事

一 英人亞國^{あいつく}にて殖民地^{しゆみんち}を開く事

一 シヨニスミス^{シヨニスミス}の事

一 ウオルガニヤ^{ウオルガニヤ}の殖民地^{しゆみんち}の事并ポカホンタスの事



近世史談初篇合衆国部卷一

吉田賢輔

須藤時一郎

纂述

亞国^{あいつく}四百年前^{しよひゃくねんぜん}の事

今^{いま}を距^{とほ}る四百年前^{しよひゃくねんぜん}の於^おては歐羅巴人^{おうろっぱじん}今日の如^{ごと}く大地^{だいち}の形^{かたち}を曉^{さと}らざりし故^{ゆゑ}之^{これ}を圓^まとせず却^{かへ}て平坦^{へいらん}と考^{かんが}へ西大陸^{せいだいろく}の大陸^{だいろく}の^あ大^おと^おな^な夢^{ゆめ}想^{さう}も及^{およ}びず只^{ただ}大洋^{たいやう}の渺茫^{びやうぼう}たるを恐^{おそ}ま若^もし西^{せい}

へ航し止まらずんば地の端不達し滾墜るの患あらんと考へ或は又畏ろしき強風淪洄不達んと考へ或は又知まりやうずる水路の西るは怪物群をおせりと考へたり斯て大西洋をば知らぬまゝにさしかきし由へ其時代の知れりたりたる西方極遠の地は葡国より八百里の路程あるアソールス島あり吁昔の事情此の如し

四百年前不於て亞国の地は今と大不異りして大なる都會あり廣き穀田あり烟筒ある家あり

馬ある牧野あり笹籬あり橋梁あり大路あり蒸気船帆前船の河あり浮べるあり又一箇の白樺人飲羅の事あらざりし扱荒野は漫々と廣く樹木は森くと茂て其所は多く鹿熊狼の徘徊するあり又清流有しと雖も寥々として海狸の忙奔のみ。人家は只木皮或は獸皮を以て蓋ひたる陋屋のみよりて叢林中より窺ふ人の姿は半裸体暗色にてありたり

如何して此国の光景斯る變化をおせしやを尋

了不是は歐羅巴人の發見せし由へあり即ち歐
 人此土地の豊あるを知り多くの人数まで移来
 樹木を切り田畑を開き耕種を始る村落を立て
 都會を設け遂に蕭條たる地を變じて繁華の域
 とおしたり然るども一個の大大夫の力不非れ
 ば今不及ぶまで歐人恐く此國を知るを得ずと
 叔亞國を發見しする大大夫は誰ぞキリスト左
 ルコロンビウスあり

コロンビウスの事

コロンビウスは意大利の國羅巴中の熱那におゐて
 生きたり叔其父母は甚ど貧うりしがよくコロ
 ンビウスを教習したりしとぞコロンビウス少時既
 不航海して諸國を尋ねたりし一日コロンビウ
 スの乗る所の船火災不達ひけりばコロンビウス
 海水不投じ泳ぎて其身を助かりたり斯てコロ
 ンビウス幾多の船旅を為し遂に地は瀾ふまに西
 航して陸不達すべきを定思せり誓へば橙を

取り之（記号）不（記号）記号を附し其裏へ指を置き之を廻さば記号の所へ達するものあり斯くあるやへコロンビユスの意（意）不（意）於て西へ航して往くときは恰も東へ向ひ往く如く亞細亞へ到るべしと考へたり但しコロンビユスは西大陸あるを知らずして亞細亞をば人々の知るよりは尚遠く東へ廣がりてあると考へ因て人の未だ探らざる大洋へ航し之を達せんことを誠んと決心せり上々既（既）不（既）説く如くアソールス島は其時代よりは

西方極遠の地としてありしが曾て烈き西風が随ひ断根したる珠しき木の此島へ流来りしとあり又二人の死骸の此島へ流来しとありしが其形欧人（そのがた）不（そのがた）あらんが亞非利加人（アフリカ）不（アフリカ）あらんが因てコロンビユスは此実事（このこと）不（このこと）尚（まだ）所思（所考）を確定し益々新地（新地）発見（発見）の旅を為さん（旅を為さん）を企てたり然れども如何して志を遂ぐべき乎コロンビユスは貪して己の船を持たざりば只其企を諸国君主不説き廻り援を求しのみ斯て先其企を熱那人不説しが

事行^{こと}を^なざりし是^{こゝろ}より葡^{ポルトガル}国^{こく}不^い到^たり其^{その}王^{おう}不^い説^せしガ
 王^{おう}速^{すみ}不^い之^{こゝろ}と米^{メキシコ}用^{よう}せり然^{しか}も^も譽^{よめ}を自^じ己^こ不^い帰^きせ
 んと欲^ほしコロンビ^{コロン}ビ^ビス^スを欺^{あざむ}き他^た人^{ひと}不^い命^{いのち}じ船^{ふね}を仕^し
 出^だしたり是^{これ}何^{なに}と卑^{いや}むべきおとふらずや然^{しか}も
 も王^{おう}の所^{ところ}為^な徒^たらりして功^{こう}おく止^やみぬ是^{これ}もあ
 るべきおとありコロンビ^{コロン}ビ^ビス^ス是^{これ}より是^{これ}班^{班牙}牙^ごを
 指^さして往^むきたりしが其^{その}時^{とき}是^{これ}班^{班牙}牙^ごは有^あ名^なの五^ご
 ル^ルギ^ギナ^ナント^{ント}王^{おう}及^{およ}びイ^イサ^サベル^{ベル}ラ^ラ后^ご世^よを御^ごせりコ
 ロンビ^{コロン}ビ^ビス^ス道^{どう}中^{ちゆう}より窮^{きゆう}困^{こん}甚^ししく其^{その}身^み并^な伴^{ばん}ひし所^{ところ}

の小^こ児^ごの為^{ため}に麵^{めん}包^{ぱう}を乞^こふよ及^{およ}びたり初^{はじ}コロン
 ビ^ビス^ス是^{これ}班^{班牙}牙^ご不^い到^たりたる時^{とき}折^か悪^{わる}く王^{おう}及^{およ}び后^ごは王^{おう}
 ー^ール^ルス^スとの戦^{たたか}ひありし由^{よし}へ人^{ひと}の嘲^{あざわ}笑^{わら}ふ所^{ところ}の焦^{あせ}悴^せ
 したる舟^{ふね}子^こ不^い傾^か耳^{みみ}すべき暇^{ひま}あらざとぞ然^{しか}も
 もコロンビ^{コロン}ビ^ビス^スは志^{こころ}を水^{みづ}泡^うとせず地^ち圖^ず海^{うみ}圖^ずを製^{せい}
 し生^{せい}計^{けい}を為^なしつゝ時^{とき}を待^{まち}てぞありたりしが終^{つい}
 不^い王^{おう}不^い歸^きするを得^えてけきだ慇^{いん}懃^{ぎん}不^い王^{おう}不^い説^せ勸^{すす}め
 殆^{ほとん}ど王^{おう}の唯^い諾^{だく}を得^えんとせし不^い折^かしも長^{なが}く續^つき
 たる戦^{いくさ}より王家^{おうけ}の費^{つひ}莫^な大^{たい}ある由^{よし}へ期^きし難^{がた}き事^{こと}

通世效談

業を試んよも賤甚ぞ乏けき王則ち博士輩の
指教不依らんと決心あり因てコロンビユスは重
大の企を陳ん為めサラマンカエて博士輩の前
不出たり然るに博士輩は憔悴の舟子の己不勝
る知識あらんとは思ひも寄らざれば曾てコロ
ンビユスの言を信用するものかし叔博士輩問ひ
ける不何と地は得て圓くある乎若し圓くある
ならば裏側にては雨は上に向て落ち樹は下不
向て長ぜん萬物は皆倒ま不たらん其面不あり

物類は定て離落ん若し船西行して彼方不達す
るからば帰路再び此方不上り得まじ何と船の
岡不帆上るまとあらんやとの言由へ王も今は
コロンビユスを拒て其要せらる船を備へざりし然
る不此不意外の事ありイサベルラ后も隆情
を加へコロンビユスの事不傾耳せんともあるもへ
コロンビユス謁見を得たりしが后も人の勸るを
遂不コロンビユスを拒まれたり叔コロンビユス
殆ど詮方なく將不是班牙を辞去んとせしが后

より喜しき消息ありてコロンビウスを再び延不
招き乃ち后は拒む心を改められ斯る緊要の
旅費不充ん為め玉飾をも質入ありしほど心不
掛けられ遂に此大なる企の為め其船を仕出
さんと決心ありしとぞ

亞國發見の事

コロンビウスは三艘の船にて新地發見の旅装を
為せり然る不乗組の人を得るの甚だ難くあり

しほと人々之を危ふみしが遂に九十人を得て
千四百九十二年明徳元才八月才三日是班牙の
ハロス港より出帆せり時ハコロンヒウス五十七
歳あり是より暫らくカナリ一島に止まり其船
の一艘を修復し遂に西を指し茫々たる大洋を
勇く駛往しガ仰て蒼天を望み俯して海水を見
るの外目に入るもの無く日々船路ゆくある由
へ小人く早く陸の隈を見得んと欲すまども見
るものあらざむは人々大に怖き船を後不戻さ

んと欲したり然きどもコロンヒユスは之を欲せ
 ざる由へ人々を勵し事成らば譽を揚ん空く庚
 らばイ升へルラ后の怒不達んと云けきども日
 も過ぎ由く不隨て人々益々畏れを増し斯ては
 遂不歸路を失んおとを憂へたり此時人々語ひ
 けするはコロンヒユスを船外不投じ船を後不戻
 すべしとありコロンヒユス此勢を知り因て人々
 不約し三日の内不繼を繼規せずんば則船を度
 すべしと云ひけるが海水次第不浅くあり水鳥

群をおして船の周囲不来り又生新の子ある樹
 枝の海不浮ぶを見てけきば遠見の番を設けか
 き厳しく氣付けてありけるが才十月才十二日
 夜半過て才二時不喜しき声ありて陸上陸よと
 呼りけきば人々狂気のおとくおを喜び暫
 時さき不海へ投けんと言らひたり其コロンヒ
 スを拜したりかくて夜明ふかよひ陸地分明不
 ありたりしが好光景ありして鮮なる花の咲き亂
 りあり長たつき樹の葉花子を持つあり皆曾て

目もも觸れざる珍らしきものあり板岸上りな
裸体の銅色人ありて是班牙船を眺めしづ船を
大鳥と思ひ帆をその翼と思ひ是班牙人をばそ
の鳥背に乗りて天より下りし神物あらんと思
ひたり

最初發見の地は大西洋の内のバハマ島にて北
南亞国の間ありコロンピュスはこれをサンサ
ルハトルと名けたり。さてコロンピュスの意にて
は東印度の天竺を來りしと考へけむは本土人を

印度人と名けたり。よりて此邊の諸島は今あは
西印度として知まぬたれりコロンピュス尚新地
を尋んとてサンサルバトルを出帆しキューバハ
テの二島を達せしがハルテにて。その船の一艘
を難破せり。かくて此の殖民を残しかき。すなは
ち土地の物産を集め且つ土人を誘て乗船せし
めつ。帰路の船旅を赴むきたり。かくて帰路の
船中畏ろしき風を逢ければコロンピュス船の
難破を患へ新地發見の始末を書きおろし之を

管小入を海に投げ込みたり。これは船中の人若し颶風ぐふうきて失せし去とあらば。その篋はこをば拾ひろひあげられて。世界よこにその名を残さんと望のぞめり。あう。志こころするに是は神の意いあらざれば。船は少し損こじたきども難あく是は班牙の港かたに帰得たり。よつてコロンビュスはフェルナント王并小イサベルイサベル后ごの新地あらた発見あひの新話あらたを聞きくせんと急いそぎ勇ゆうんで進すすみたり。コロンビュスの過あると去の道中みちには窓まども往來ゆきも群集ぐんしゆせる人充満みちみておれを窒おさぐ

ばかりあり

コロンビュス始はめて亞国あめりかを發見あせしは實じつ小千四百九十二年しんねん明應元あきかみ才十月才十二日あり

コロンビュス尚なほ三四船旅せんりょをおす事こと是こゝカボットの事こと

コロンビュスの新地あらたを發見あしたる新聞しんぶん歐羅巴中おろばちゆうに傳播でんぱせしが大おほい人ひと気を引ひ起おこしたり。さうして新地あらたのおと小舟ふねき奇怪きかいの話をはなしおすものあり。その

話ト新地トは金剛石の澤山トあると尋常トの
 石の如く。かつ又黄金の生ずる樹トあるとぞ。あれ
 小因りて船を備ヘるの力トある舟子等トは皆西へ西
 へと呼ビたりたりコロンビス尚三回西の世界小
 旅トせしが三回トのとき小おめて始めて亞の大
 陸小達トしたり時小千四百九十八年ト明應七トあり。
 さへコロンビスと同行の者。或は怨言トをおすあ
 り。あれは望ミみしがとく黄金を澤山小見出トさ
 りしかへあり亦是ト班牙小おゐてもコロンビス

を憎むものありて種々の偽説トを述立トしうば王
 后トも是等トの説小動トかされ遂小コロンビスの
 官職を奪ヒひ之を呼戻トされり。さへ又其後コロ
 ンビス才四回の旅トをおせしがコロンビス最早
 老トたる身トありし小此時トジャマイカの海岸
 へて。その船難破ト小およびたり時小土人等はコ
 ロンビス并其一行の者を救トまざるのみおらば
 且トあれを襲ヒんとせしがコロンビスの星学小
 達トせら小よつて幸トひ小一行の者共トその命トを助

かりたり。扱コロンビユスは或夜月食あるを
 知り丁度月の蝕せんとき土人等を呼集
 めつ其言ふ汝等は班牙人を救むべしと云へ神
 ありて怒られけむは頼てその顔を掩むるべし
 と云けるが月は次方暗くありける由へ土人
 等は是言を信じ是班牙人の助を祈すべしと約
 束し跪ちづきてコロンビユス小請ひ今一回神の
 顔を拜せんを願ふと云けるが月食の後土人等
 その言を保ちし由へその助を乞はりてハリーテヤを戻

り得たり。此よりコロンビユスは是班牙小帰り
 しが千五百六年永正三小當り遂は是班牙より
 死去せり吁その死せるときも窮困の身ありて
 ありしとぞ

アメリカゴウエスプートシーといふ人新地を尋ね
 しが此人歐羅巴小帰りし後書を著し偽てコ
 ロンビユス小先だち紐の大陸小達せしと云たり
 けるが此書を信ずる人多けむは遂小賣の発見
 者の名小従せずして却てあの人小従て土地を

バアメリカと名けられたり

北亞小達せしとあるの最先さいせんの人は英人えいじんにてジ

ヨンカボットと云ふ人あり此人は千四百九十七年

明應六あきつみふかぬてニウホウント、ランドを探訪せ

う欧羅巴おうらふにて始めて見しとあるのトルキトルキ名島

は此人の持来りしあり此人セバスチンといふ

子息ありしが亦亞国あまのくにふ數回の旅を為したりし

とぞ

バルボア、マゲルラン、コルテズの事

バルボアは西國にしふあり是班牙ばんがの一殖しつ民みん地ちの鎮

臺たいありしが千五百十三年永正えいせい申しん九くふ當りその地

の南方みなみふ積水せきすいあるを聞きき二百人を引率いんそつし土人

を案内あんないとし、あせふ達せんあとを企きてたり時ふ

バルボア共一行のもの皆重おもき鎧よろいを着きしたり。う

くて路上多少の艱苦げんこを経へ。遂ついにふバルボアは案内

者の水を望み得べしと云しとあるの嶺みねふ登のぼり

しが。その嶺上ふ登りし前ふ他の者を止とどめおき

唯一人として巖上へ登りたり。叔巖上りてバルボアは渺漫たる太平洋を瞻望し得てければ此叢見のあとを神不謝しおまより海岸へ下り一手小旗を執り一手小剣を執り水の膝へかよぶまや水中へ踏込みつ。云けるは我は是西班牙のため此海を得たまは若し他人おれを得んと欲すとも我かあらばおまを阻かんとぞ。

葡萄牙人小マゲルランといふものあり。此人亞国へ航し南亞の南へある海峡を過ぎ大平

洋太平洋の船けし名あり。小帆くけし路の上りてその命を失ひたり。おまもその船隊中の一艘。亞非利加の喜望峯を廻り西へ航ししり。遂に三年の航海の後本國へ達し得たり。おまは曾て此大地を廻りて航海せしとあるの最先の旅あり。おれふて大地の形如何を證し得べきあり。

おまは次て千五百十九年永正十墨是哥へ大て是西班牙人の勝利あり。墨是哥は亞國へあり。

ある帝國よりて他部の土人無比な遙かな開
明ありし故に殿堂あり學舎あり政堂あり斯て
其国の人民耕作を知り鑛業を識り其等の仕事
不憚事せり國帝は大なる都ありし所の美
る宮殿に任し黄金の器皿を用ひ許多の貴族を
して左右に侍せしめ自ら統して全世界の主と
いへり叔墨是哥人は真神を拜せ且木石の像を
尊びたり

キエバ其近島に集在せし所の是班牙人の帝

國の富を聞きしうばみれを征取せんと欲し遂
に六百人の許の人数を挙げコルテズを將として
諸の兵器を用意し以て數百萬の墨是哥人に向
て出陣せり。さて此是班牙人墨是哥領内に上陸
せしが國帝の事を聞き大に驚き速に使者
を遣し立許多の贈ものを為し是班牙人の其領
内に立去べきやういひ送りたり。あかきどもコ
ルテズは贈りものを受けしが立去まとの命を
用らばすおはち乘り来りしとあるの船を焼捨

墨是哥領の内部に進み入りたり叔帝都に達せし前、道中にて數度墨是哥の大軍と合戦し、おこむびたりしか。是班牙人毎に勝利を得たり叔墨是哥人は曾て知らざる大砲小銃の火を吹き出し人を刈り倒すを怖き又騎兵をば半人半獣の怪物と思ひ大ひ小驚きたり蓋しおれよりききろは亞国におかゝて馬を見しものおしかゝて是班牙人は墨是哥の都に進み得し後一回都より追出さざし、が遂に又進み得て都を取り墨是

哥人を服従し、尔後三百年の間は是班牙の属国とせり。さて都を取りたりとき墨是哥人を扱ひしさまは、最も暴悪のおとろてありたり

佛蘭西人の發見の事并デソトの事

是班牙英吉利のおとく其他の国もても亞国におむむやいさす
 向け船を送り出したる、斯て千五百二十四年秋
 四年、小當り佛蘭西の航海者の一人カロライナより、ニウホウランドを探索せしが此人

全地を新佛蘭西と名けた。その後佛人カルチ
 ー亜国へ數回の航海をなしシントラウレンス
 河へ入りたりしが暫時の後數多の佛人亦亞国
 へ來り此河の邊へ住居せし小寒氣不堪への補
 けまば一冬を過せし後各々帰国せんと欲した
 りしとぞ
 さて金銀を貪ぼりしとあるのは是西班牙人引き續
 きて來到せしがその内小デソトと云ふ人あり。
 ちの人六百人の人數を率ひフロリダの海岸へ

て上陸し是より此所彼所を徂徠せり蓋し是は
 アラバマジアルシヤの地方あり叔行々土人の
 財宝を掠め或は土人を殺害し或は小事を名と
 して土人の村落を焼きたりしうば大ひ小土人
 を激怒せりデソトは尚進みおきしがその志す
 とあるを得ず。その人數も雨露不晒され病を醸
 せしむへ死するもの多ければデソト大ひ小失
 望し遂小路上りて病死せり此後残りしとある
 の人數は許多の困苦を経。是班牙人の居るとあ

ろの殖民地小達したりしが實小此旅して四年餘を費したり

英人亞國小かゝて殖民地を開く事

亞國小かゝて歐羅巴人の探訪せし地は許多小

世どもコロンビユスの發見の後七十年の間は今の

合衆国の部内小白哲人の住居あらざりし。初最

初小殖民地を開きしは是班牙人小て。早く千五

百六十五年永録セハ小當リフロリダ邦のシント

アীগスチンといふ地を創立せり。此等は合衆

国中の最古の殖民地なり。初最の後四十年を経

ノアスコチヤ小かゝて佛人殖民地を開きたり。

又その後同国人チヤンプレーンといふものカ

ナダ小かゝて殖民地を開きたり。すかほち今キ

ビッキの地方ありニウヨルク邦内小チヤンプレ

ーンと云ふ美なる湖水あり是の湖を發見し

たる人の名小依て名けられたるあり此時代小

かゝては亞國小て佛人北方を保ち是班牙人南

方を保ちたり

佛と是班牙と小て領せしとあるの地の中間小

おもて英國小て要せし所の大なる地方ありし。

叔此時英小てはイリサベスといふ名高き女王

世を御せしが女王の寵臣小シルウアルトルレリ

と云ふ人ありて亜の地小殖民する處とを企

てたり。よつて二艘の船を用ゐ一隊の人数を發

遣せしが。古の船は北カロライナの海濱小到着

したり。時小ある人とは富且快よき地方を見出

したり叔その後英國小往きしとき二個の土人

を引連き探訪せしとあるの地方の事を述立し

うば女王は實小満足ありし蓋し女王もな

細の地小おもて金を掘り穀を殖す。以てその

利を得ん處とを望まれしあり叔レリは女王

の趣舞ふよりて殖民仲間を差送りしが此仲間

のもの共ローノーク島の快よき地小達し。あ

小定居せり然るに鎮墓たるもの心を用ひずし

て猥り小土人の村を焼き且事の行違ふて土人

を殺戮せしうば大ひふ土人を激怒し復讐の念
 を生ぜしめたり叔殖民仲間も大ひふ勢を失ひ。
 多く英国に歸りしが。その残りしものどもは土
 人の手ぬて殺さむたり時小鎮合たる人英国に
 歸り食料等の用意をなし。再び島の島不到りし
 が一個の白替人を見ざりしあり。是は土人の手
 の死せしう。すくは荷ひ去らむしう。定かあらざ
 りし。よつてレリリーも詮方なく亜国におゐて殖
 民するの企を止り。叔レリリーはその後反逆の

企くわめて死刑しつがい不処ふしょせらむども實じつ小當代せうたいの豪傑ごうかくふ
 り。それゆへ小北カロライナ邦の首府は。あの人
 の譽ほまふよりて。その府の名をレリリーとレリりか叔しレ
 リーは歐羅巴へ初めて馬鈴薯ばしんじゆを持ち来り且かつ又
 初めて烟草たばこを持ち来りしがレリリー曾かつて其室そのしつ小
 おゐて烟草を喫くせし小従者とんじやは固かより烟草を用もち
 る衣いを夢ゆめるも知らざれば烟の巻まきいでしを
 見て大ひふ驚おどろき主人の体かみに火の付つきしあし
 考かんへ其室そのしつ小ありあてせたる麥酒まきしゆを洒そぎかけた

りししぞ

英人の建たる殖民地の始免て永續せしは英人
 ニウホルトの支配したる仲間より成りし。叔
 ウホルトは千六百七十年慶長十二年丁未
 間を率ひて亞国に渡来しジエームストン府を
 建たり。かくてニウホルトは速に英國に立戻り
 し。去るに及ばずして去るの殖民仲間には病を得
 るもの多しとして遂に一週間の間に死する者
 その半に及びたりけり。生きたる者の共は

唯茫然と呆れ果てありたりし不幸にシヨニス
 ミスといふ一人の豪傑ありて怯懦の人々を勵
 ましつゝ土人の害を拒ぎ殖民の業を務めたり

シヨニスミスの事

シヨニスミスは千五百七十九年天正七年己卯におお
 て英國のリンコルンシャーに生れしが少年の
 とき其家を逃れ出で兵士となりて自主の爲め
 小戦争におよびしとあるの和蘭人を助戦ひ。お

是より暫く日月を送りけるが。そより所々を
 徘徊し佛蘭西に赴き又埃及に到りたり實にス
 三は好事の勇者なまば此所彼の所の戦争に加
 ちたり曾てオングリ一國に於て兵士とな
 り都現格人と戦ひしが。その勇しきありさまは
 實に古の俠勇に彷彿せり。去るれども此時ス三
 スは多くの手創を買ひ遂に捕とありふける却
 説ス三は奴僕に賣らばし小甚だ苛逆の扱ひ
 を受けしうば。去れを逃む路なき難所を過ぎて

魯西亞に到り夫より又若干の危を侵し遂に英
 の本國に立ち戻りたり時小英小ては亞國に殖
 民地を開らんため其用意の最中なまばス三
 はニウホルトの仲間に加ちり亞國に赴きたり
 叔ス三は亞國に來りし後ウオルヂニヤに於て
 曾て土地の模様を探んため舟にて出下往き
 けるが一行のもの小命に舟に留らしめ身は之
 を探んたを上陸せし一行のものどもその命
 を用ゐずして亦上陸せしが不意に土人に襲を

れその手もて殺さむたり去の時スミスは勇を
 振て戦ひ既ふ三人まで土人を殺せしが誤て深
 き沼の内へ陥りけむな今は進退自由ならず遂
 小土人の手へ捕まひたり。かくてスミスはポー
 ハタン王ありの前者引出さむし死罪を行ふ
 べしと議決しければ一の大石の上へスミスの
 頭を置き重き棒を以て頭を打碎かんとせり危
 哉今行刑者既ふ棒を振り挙げしふ忽然として
 十二歳の少女出で来り身を以てスミスを掩ひ

涙を浮かべ捕者の命を乞ひけるが皆く少女の仁
 心もや感じけん遂ふスミスを救したる此少
 女はポーハタンの子らありたり。去れりス
 ミスは懇切の扱を受け難くゼームストーン小
 船に歸りたりしが此時ゼームストンの殖民仲間
 漸く減じて四十人ありければ皆詮方なく此
 地を立去んとせしふスミスは去むを留めたり扱
 此少女の名を問ふふポカホントスと去へると
 ぞ

ウォルチニヤの殖民の事并ポカホンダスの事

千六百八年慶長十三年戊午三月三日
チエスピーキ湾并其湾に流注する所の許多の
大河を探り得しが遂に舟を離れ徒歩して遠く
ニウヨルク邦の南部の荒地まで進みたり叔ス
三スの種不在り殖民地の事を掌どりし間英
より来りしと云ふ所の人民多くは懶惰にて穀物
の殖付をなさざり唯金を得んおとのみを欲した

り。この時スミスは土人小追従して僅小その食
物を得たり吁斯る場合小おゐて若しスミスが
かりせば英人恐らく餓死せしからん叔スミス
は引續きて善く殖民地を治免しが。その後火薬
の暴発おて創を受けし小より遂に英國小歸り
たり。云々のスミスは歸りし後は殖民地の摸
様速小悪くかりて逃去るものあり又餓死する
ものありしが幸ひ小ロルド、デラワル人衆を率
ひ食物を携へ来りて之を救ひたり此時殖民地

よては貨幣大ひに乏しき也へ烟草をもてあれ
が代用をなしたり

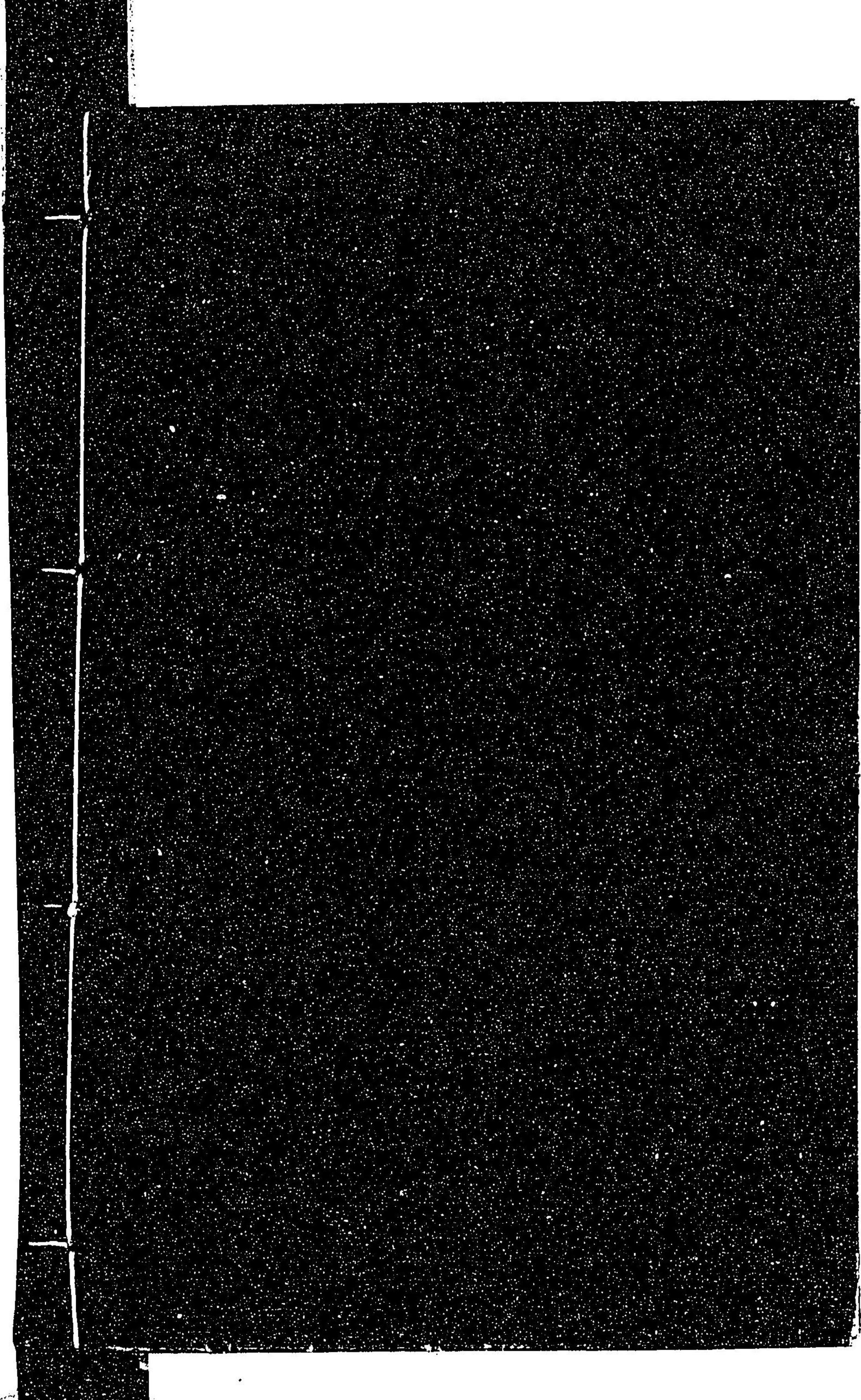
却説その後ポカホントスは英大ロルフの嫁せ
しを遂にロルフと共に英国都府ロンドンに赴
きける少數多の人來り訪て皆ポカホントスの
美ふして且婿ある態度を稱讚せりその後亞の
地小立ち戻らんとせしか率爾に病を得終に二
十二歳而て一人のトーマスといふ子を遺しつ
と英国におゐて死去したり。かくポカホントス

の英國に往きしに當りその父ポーハタンは
一人の武夫をしてポカホントスに伴せしめし
か。その後此武夫の立ち戻りしときポーハタン
去れに多くの問をなしける其言の中は汝英國
におゐて如何に多くの人民を見しやと云ける
が此武夫の答に空際くうまの星を數へよ樹林じゆりんの葉を
數へよ水濱すゐべんの沙を數へよ其由へは英國人民の
數此のおとししと云ひたりしとぞ

東京書林

淺草茅町貳丁目

須原屋伊八版



特32

200

003569-001-5

特32-200

近世史談

吉田 賢輔/述

M5

ACD-0110



明治五年鐫

近世史談

共立舎藏版

近世史談初篇合衆國總叙

合衆國は我鄰談の國りて彼我人民の往來極て
 多けきば隨て我國の士民亦多く彼國の政体凡
 俗を論ぜり然も政体を論ずるは固より易
 事あらん況てその國を官り之を家おせざ
 りの合衆政体を論ずる是豈お難事おあらざや
 蓋し政は國風民情お從をざるを得ざるは彼國
 の合衆政体も偶然にして成おあらん必其由て

近世史談

叙

一